

企画者のことば

生殖医療は、患者さんやご家族の人生設計に深くかかわる重要な分野です。不妊に悩む人々に寄り添い、妊娠・出産という大きな目標をともに実現していくことは、産婦人科医にとって大きな責務であり、やりがいでもあります。世界で初めて体外受精児が誕生してから40年以上、日本で初めての体外受精児誕生からもすでに数十年が経過しました。その間に顕微授精(intracytoplasmic sperm injection ; ICSI)、胚盤胞培養、胚凍結保存といった技術が標準化され、今では年間数万件の体外受精出生が報告されるまでに至っています。少子化や晩婚化が進む社会において、生殖医療は今や欠かせない医療の1つです。

しかし、いざ学ぼうとすると、生殖医療は「難しそう」「とっつきにくい」と感じられることが少なくありません。婦人科腫瘍学や周産期医学に比べ、内分泌学を中心とする知識体系は複雑であり、学習のハードルが高いと感じられます。研修医や若手医師のなかには、生殖医療を敬遠してしまう人も少なくないでしょう。また、生殖医療の専門医であっても、婦人科疾患や周産期合併症の理解が十分でないまま診療にあたる場合があり、患者さんにとって必ずしも最適な医療にならないこともあります。

本来、生殖医療は産婦人科の全分野とかわりをもつ学問です。子宮筋腫や子宮内膜症といった良性疾患、内分泌代謝異常、高齢妊娠に伴うリスクなど、多くの因子が不妊や妊娠経過に影響します。そのため、生殖医療を理解することは単なる専門技術の習得ではなく、産婦人科医として幅広い診療能力を高めることにもつながります。

本書は、こうした背景を踏まえ、できる限り実践的でわかりやすい形を目指しました。成書のように膨大な理論を網羅するのではなく、日常診療で直面する具体的な疑問や課題を切り口とし、専門家が「明日から使える知識」として解説しています。正常妊娠の基礎メカニズムから不妊症の診断、一般的な婦人科疾患との関連、さらに生殖補助医療(assisted reproductive technology ; ART)の実際まで、臨床に直結する内容を1冊に整理しました。

想定読者は、研修医や若手産婦人科医はもちろん、生殖医療を専門としない医師や関連職種の方々です。「生殖医療を学びたいけれどどこから始めればよいかかわからない」という方にとって、本書は格好の入り口になることを期待しています。また、すでに臨床に携わっている方にとっても、自身の診療を振り返り幅を広げる契機になるはずです。

本書が、生殖医療の「難しい」イメージを取り払い、多くの医療者にとって親しみやすい知識の架け橋となることを願っています。患者さん一人ひとりに最適な医療を届けるために、本書が日々の診療を支える実践的な道標となれば幸いです。

2025年11月吉日

医学研究所北野病院産婦人科 主任部長

近畿大学医学部産科婦人科学教室 講師

近畿大学医学部産科婦人科学教室 教授

堀江昭史 Akihito Horie

村上幸祐 Kosuke Murakami

松村謙臣 Noriomi Matumura